

# AsiaWave

**vol.163**

Life&Culture **13**

「フマン・愛  
オコ」@「ニユ」

中国タクヤ

本「小学生」に英語を教えるとはっ  
アジアと日本の教育現場から」

村田広幸

バタールース駅

映画『花はこへいった』

「黒い家」

中川昌俊

南北朝鮮 緊張関係高まる

**6**  
特集

A. ラマチャンドラン  
の美術の創造はどのよ  
うになされてきたのか

**黒川妙子**

**1**  
フィリピン写真館  
平早勉

フィリピン・  
ホスピタリティに  
魅了されて



フィリピン・ホスピタリ  
ティ(献身的な愛)に魅  
了されて

写真・文 平早勉

混沌としたフィリピンの街を歩くのが楽しい。陽気で元気なフィリピンの子らに会うと、僕はとっても幸せになる。

昨年暮れに久しぶりにマニラを訪れた。これまで海外80カ国/地域を歩いてきたが、フィリピンは別格。20回近くは足を踏み入れている。何故、僕はこれほどこの国にハマるのか？(次頁に続く)

からだに入れた刺青を自慢する若者。無職の二人はどうやって暮らす!?

(平早勉撮影)

# 平早勉の フィリピン写真館

フィリピン・ホスピタリティ  
(献身的な愛) に魅了されて—



小学校で元気に学ぶ子どもたち。授業を中断して、カメラに熱視線！



巨大スーパーマーケット「SM」に買物に来た女子大生。

一番最初に訪問したのはサラリーマン時代の70年代。ホテルで働くものすごい美人に恋をして、乗馬デートしたり、母親手作りの家庭料理を振る舞われたりした。祖父がスペイン人パイロット。メステイソ（混血）美女なので彼女はモテモテだった。

85年以後の大統領になるコリー・アキノと娘のクリス・アキノをそれぞれ日本の雑誌や新聞で紹介し、86年には「2月革命」。マルコス、イメルダが脱出した直後のマラカニアン宮殿に、世界のカメラマンの一番乗りを果たした。スクープ写真は20数誌／紙、テレビで報道された。

以来、アキノ、ラモス、エストラダと歴代大統領を取材したり、アロヨ現大統領以降も定点観測中である。



クラブで豪遊。ドリンクを飲むとチップ収入になるので女の子もハッピー。



バーやクラブ前では白人観光客と冗談を言い合い店に誘う。

夜の街で花束を売り歩く女の子と母親。子どもの方がよく売れる。(23時撮影)



デパートの携帯電話売場は10店舗以上。若者を虜にする。

今回の取材旅行で一番強く感じたのが、貧富の格差が拡大していること。05年統計で、GNP1300ドル。富の配分が決して国民総体に行き届いていないことを実感させられる。

例えばマニラ北部のアンヘラス市。キャンプクラーク米軍基地跡地に出現したのは、巨大スーパーマーケット「SM」。高級ブランド品や子ども向けのミニ遊園地、レストランが立ち並ぶ。いかにも裕福そうなファミリーが主な客層である。SM外にある昔ながらの食堂で、わずか2品とライスを頼み70ペソ（約180円）の遅めの昼食に舌づつみを打っていたら、同席したSM内のブティック店員4人組が50ペソのランチ。「何で、SMのレストランで食べないの?」と聞くと、「貴男は何でS



マニラの食堂で働くカップル。「故郷のミンダナオに帰りたい」と。幸あれ!!



裏路地で寝起きするファミリー。生まれてきた赤ん坊は神様の贈りもの。

さしに触れに、これからもこの地にハマリ続けるに違いない。

物足りない時は近所の食堂で余り物をもらってくるのよ」と。ここにも、フィリピン・ホスピタリティ。僕もその優しさに触れに、これからもこの地にハマリ続けるに違いない。

若いおばあさんは「街角で小銭をもらう毎日だけど、食べ物足りない時は近所の食堂で余り物をもらってくるのよ」と。ここにも、フィリピン・ホスピタリティ。僕もその優しさに触れに、これからもこの地にハマリ続けるに違いない。

だその日暮らしに追われているのに、どこか陽気。

若いおばあさんは「街角で小銭をもらう毎日だけど、食べ物足りない時は近所の食堂で余り物をもらってくるのよ」と。ここにも、フィリピン・ホスピタリティ。僕もその優しさに触れに、これからもこの地にハマリ続けるに違いない。

撮った写真を届けに3回ほど訪れると、最初は僕のポケットから小銭や小物をくすねようと狙っていた子どもも人も、人なつっこい笑顔。小銭をせびらなくなった。ストリート・チルドレン生活も大変なのに。6年間の義務教育も行けず、ただその日暮らしに追われているのに、どこか陽気。

若いおばあさんは「街角で小銭をもらう毎日だけど、食べ物足りない時は近所の食堂で余り物をもらってくるのよ」と。ここにも、フィリピン・ホスピタリティ。僕もその優しさに触れに、これからもこの地にハマリ続けるに違いない。

Mで食べなかったの!？」と切り返された。店内は高過ぎて、彼女らも利用できないのである。

夜のバーやクラブで働く女の子たちの口ぐせは「腹へった。何か食べ物を持っていない?」だ。ある晩、一羽のローストチキンを買って親しくなったバーのママに差し入れすると7、8人の女の子が寄ってきて、みんなでおぼる。分かんないもフィリピン伝統の「ホスピタリティ」である。

マニラのデパートのショウウィンドウには携帯電話やアイポッドが陳列されている。携帯は今や若者の人気商品で、一種のステータス代わり。しかし通話料金未払いを恐れてか、そのほとんどはプリペイドカード方式である。アイポッドはソニーとか日本のメーカー名入り。若い女性店員は「中国製の偽物よ」と。イヤホンを耳にはさんでみると、結構、音質は良い。携帯、アイポッドとも価格は2000ペソほど。約5000円は、売場の店員の給料1ヶ月分に相当する。

商業地の裏路地に足を踏み込むと、裸足の子どもが「金をくれー」と次々と手を出す。何家族も肩を寄せ合って生きている路上生活者の溜まり場であった。生後2ヶ月の孫娘を優しく抱く5代のおばさんは、「ここが私たちの宿よ」と路地すみに敷かれたダンボール紙を指さす。大きなダンボール箱の陰で恥ずかしそうに着替える20歳前後の女性もいる。

撮った写真を届けに3回ほど訪れると、最初は僕のポケットから小銭や小物をくすねようと狙っていた子どもも人も、人なつっこい笑顔。小銭をせびらなくなった。ストリート・チルドレン生活も大変なのに。6年間の義務教育も行けず、ただその日暮らしに追われているのに、どこか陽気。

若いおばあさんは「街角で小銭をもらう毎日だけど、食べ物足りない時は近所の食堂で余り物をもらってくるのよ」と。ここにも、フィリピン・ホスピタリティ。僕もその優しさに触れに、これからもこの地にハマリ続けるに違いない。



昨年11月末にたった一日の「革命」さわぎ。舞台になったその2日後のペニンシュラホテル。

インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどからはるばるやってきた衣料品・織物・アクセサリー・楽器・CD・DVD、、、が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アマリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるばる屋通信☆

**インド・バリからオリジナル春物衣料品  
タイの衣料品 雑貨続々到着中です**

★ 4月末から軽井沢店オープンします ★  
連休後、7月までは土、日だけ営業します

☆ **インド製レトルトカレー好評発売中** ☆

**4-29 ベリーダンスイベントに参加します。  
詳しくは、こちらへ**

<http://gourmet.gyao.jp/0004001007/>

ネットでのお買物もお楽しみください！



中東や日本への仕事を紹介する派遣会社前で、真剣に掲示板を見つめている。

### 平早 勉 (ひらはや・つとむ)

1948年千葉市生まれ。中央大学卒。サラリーマン生活を経て30歳の春以降、ヨーロッパ、アフリカ、北南米、中東、アジアをめぐる4年半の海外放浪。帰国後週刊読売の契約カメラマンのちフリーになる。ライフワークは子供の目線で撮る「世界の子供たち」現在渡航国は80ヶ国を数える。日本＝トルコ友好発祥の地、和歌山県串本町より「串本大使」を任命される。2008年4月には、写真集『7歳のプレリュード』（仮題）

# A. ラマチャンドランの美術の創造はどのようになされてきたのか

その足跡と背景について

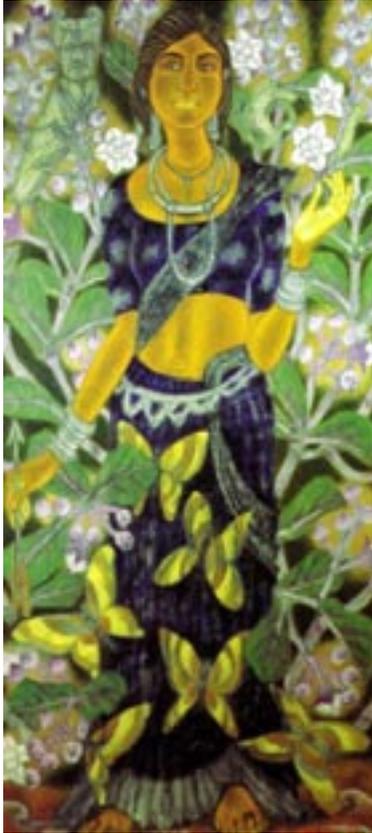
ICLC主催の講演会（2007年11月1日）から

国際識字文化センター事務局長  
インド文化研究者  
**黒川妙子**

昨年の11月、現代インドを代表する画家・ラマチャンドラン氏が、新しく絵本が刊行されることを記念して来日した。その際に行われた講演やシンポジウムのエッセンスを、アジアウエーブ誌上で再現し、この大画家の画業の真価を確認する。

1960年代から今日にいたるまで、日本と非常に深いかわりをもつインド現代画壇の巨匠がいる。この画家は、比類のない豊かさと美しさを持ち、長い年月の間にその新鮮さを失わない数々の絵本を、子どもたちのために描き続けてきた。代表的な絵本作品は、よく知られている「おひさまをほしがったハヌマン」、「ヒマラヤのふえ」、「まるのうた」、「ジ

ブヤとひとくいドラ」などで、近刊には「黄金のまち」、「大亀ガウディの海」、「10にんのきこり」などがある。その画家、A.ラマチャンドランが、約12年ぶりに2007年10月25日から11月12日まで、国際識字文化センター（ICLC）の招きにより、国際交流基金の協力で開催された。



ミナマー 1994



右・ラマチャンドラン、左・黒川妙子

今回は、「10にんのきこり」（平成20年度児童福祉文化賞特別推薦作品・講談社刊）の出版にあわせての来日であったが、「ラマチャンドランの世界」と題した絵本原画展において、近刊の絵本「10にんのきこり」、「大亀ガウディの海」、「黄金のまち」の、それぞれ異なるスタイルの三作品（作品のあらすじを文末に紹介）の原画が、東京の表参道にある国連大学の1Fにある地球環境パートナーシッププラザで展示されたほか、11月1日には中目黒GTPプラザホールにて、講演会（松居直との対談・DVD上映を含む）

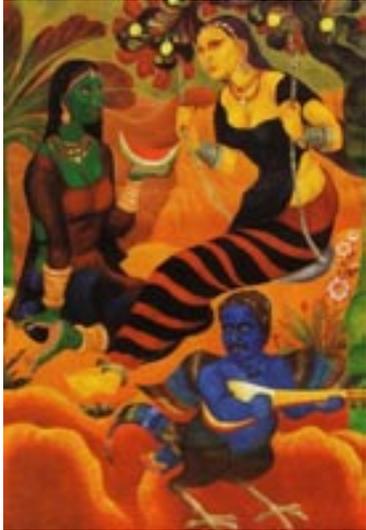
が行われた。上映されたDVDは、「蓮池—ラマチャンドランの世界（LOTUS POND—The World of Ramachandran, Bikram Singh 監督作品）」と題した作品で、ラマチャンドランの画家としての足取りを、細かく追った初めての映像作品で、解説はすべてラマチャンドラン自身の著作物やインタビューから集められ、再構成されたものである。

現代インド画壇の最も重要な画家の一人として絶大な評価をうけているA.ラマチャンドランは、1935年南インドのケララ州に生まれ、ケララ大学で文学の修士号をえた後、インド東部のタゴール国際大学（シャンティニケタン）で、近代インド絵画の先駆者のナンダラー・ボースやラムキンカール・ベジなどのもとで美術を学んだ。日本画家の秋野不矩との親交は、そのシャンティニケタン時代に始まり、秋野不矩がこの世を去

が行われた。上映されたDVDは、「蓮池—ラマチャンドランの世界（LOTUS POND—The World of Ramachandran, Bikram Singh 監督作品）」と題した作品で、ラマチャンドランの画家としての足取りを、細かく追った初めての映像作品で、解説はすべてラマチャンドラン自身の著作物やインタビューから集められ、再構成されたものである。

## A. ラマチャンドラン

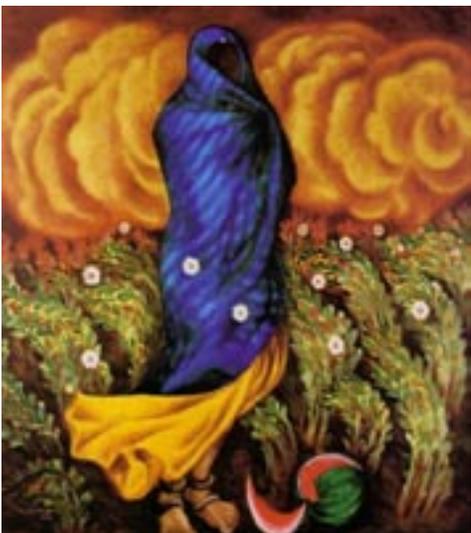
1935年南インド・ケララ州に生まれ。タゴール国際大学で本格的に美術活動をはじめ、ケララの寺院壁画の調査研究を実施。長年にわたり深い哲学、自然観察、社会的認識にもとづいた意欲的な油絵大作を次々に発表。一方、自身はヒンドゥ教徒でありながら、イスラム教系大学の美術学部設置に精力を注いだ。1980年頃からインドの伝統的な視覚表現を強く意識した独特な世界を構築し、常に注目される現代インド画壇の重鎮。日本では絵本作家として数々の名作で親しまれている。2005年インドの文化勲章を受章。現在ニューデリー市在住。  
<http://www.artoframachandran.com/>



ヤヤティシリーズ (部分) 1986



シャンティニケタンの風景 (素描) 1962



andhi 1983

ラマチャンドランの絵画は、1984年に発表された代表作のひとつ「ヤヤティ (Yayati) (インド神話で王国とひきかえに、不老不死の息子の若さをえた王の話) ごろから、まったく内容と作風が

このため今回初めて、DVDの「蓮池」が日本で上映され、絵本とはまったく様相の異なるラマチャンドランの表現世界が紹介された。そこでこのDVD解説の内容の一部を紹介しながら、ラマチャンドランの思索や創造活動の源泉や背景の一端をみていきたい。

\*\*\*\*\*

ラマチャンドランの絵画は、1984年に発表された代表作のひとつ「ヤヤティ (Yayati) (インド神話で王国とひきかえに、不老不死の息子の若さをえた王の話) ごろから、まったく内容と作風が

\*\*\*\*\*

るまで約40年にわたり続いた。ラマチャンドランの創作エネルギーの大半は、絵画(油絵と水彩)や彫刻にさかれています。日本との関係が深いにもかかわらず、日本ではラマチャンドランの絵画や彫刻作品は、これまでまったく紹介されてきたことがなかった。

かわった。それまでは、社会状況や問題を痛烈に批判し、表現形式もいわゆる典型的な現代美術の作品が大半をしめていたが、「ヤヤティ」以降は、神話を伏線にしなが、様々な象徴的なモチーフを用いて、ラマチャンドランによる新しい現代的な神話を再び語りなおすといった内容の作品をうみだしていくようになった。自然と人間(多くが女性)が見事に描かれ、その濃密で美しく、官能的ともいえる命の賛歌を、巨大なキャンパスの上に展開している。何十にも絵の具を塗り重ねながら、はじめて得ることができる絶妙な色調が、見るものを魅了して離さない。ラマチャンドランがなぜ批判されながらも、このように現代のインド神話の語り手のように作品を作り続けるのか、自身はDVD「蓮池」の中で次のように語っている。

「私はもはや芸術が、貧困を除去したり、戦争を回避させるなどといった世界をかえられる力をもつとは信じていない。万一そのような力が美術にあるとするならば、ピカソのゲルニカがそれ以降のあらゆる戦争をやめさせられたことになる。しかしそうはならなかった。それでもゲルニカは偉大な芸術作品であるのは、この作品がこれまでとは一線を画して、美術における革命をおこしたからである。そして私にとって芸術とは、人々に静かで澄んだ心を獲得させることにある。人は音楽を聴いたり、本を読んだり、美術を鑑賞する際に、それぞれの心の中心で小さな美しい世界をつくりあげる。私はそうした心をもたらず絵を描きたいのである。しかもそれは同時代を生きる人々にだけではなく、未来にやってくる人々にも深い喜びを、その一人一人の心の中に喚起できるような作品をうみだしたい」と述べている。

現代社会批判をも、直接的な形をとるのではなく、象徴的に神話的世界で深く刻まれる作品を作りだす以前のラマチャンドランの、美術活動初期の作品は、テーマこそ人間の本質を鋭くえぐるものであったが、表現方法はある意味で、ヨーロッパで培われた枠組みの延長線上にあったとラマチャンドランは語る。

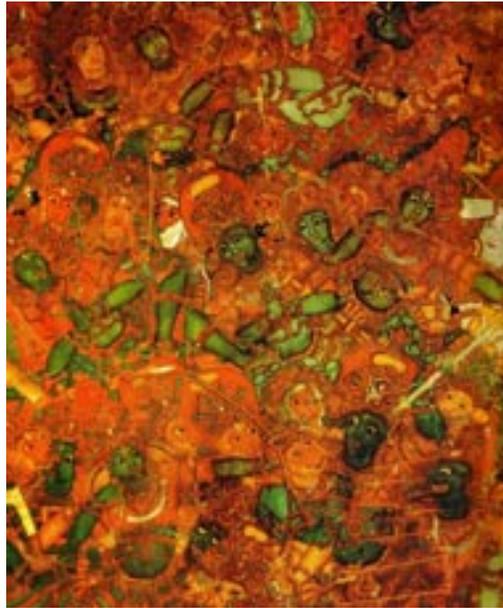
「このため、以前の私の作品は容易に周囲から受け入れられたのだ。しかし私が自らの伝統を意識し、このインドの地の先人たちが残した美術表現の枠組みに学びこれに連なりながら自分の表現を追い求めるようになって、その作品は周囲の反発を受け、単なる伝統回帰者として、批評家には酷評された。しかしなぜ自分自身の伝統に対する理解なしに、どのような美術運動も概念も、自らの意味ある関連をみいだせるのだろうか」と一貫して作品をつくりだしてきた。そして実はこのような姿勢はシャンティニケタンでの美術教育がまさに説いてきたことでもあることをラマチャンドランは語っている。

「シャンティニケタンでは、教室の中で教えるのではなく、外の自然が私たちの先生だった。近くの村にかけ、人々や風景をスケッチすることをさかんにや

らせた。この現実の生活をスケッチし、自らの想像力とあわせて作品を作りあげていくという習慣は、その後もずっと私の習慣となっていた。

シャンティニケタンでは、ナンダラル・ボースの考えが学校全体の方向性をひびきかかっていたが、彼は伝統的な表現世界や特にその中でも民俗絵画に、現代画家がつながりを見いだすことの重要性を訴えた、インドで最初の画家の一人であった。彼は完成された高度な美術と民俗美術とを分け隔てて考えることはなかった。この彼の偉大さを理解するのに、私も何年もかかったが、今日に至るよう

やく、彼の美術哲学や美術教育に関する貢献は、他のどんなインドの画家もこれをしのごとはできないほど、傑出したことがわかる。私の師匠であるラムキンカール・ベジでさえも、自分の作品



ケララ州にある寺院の戦争壁画（16世紀）

ラムキンカールが教えてくれたことは、技術をこえたものを見ることであった。いわゆる美術のきまりごとや美術学校で教えてくれるようなものをこえて、自分自身の哲

師匠のラムキンカール、そしてヴィノド・ビハリ・ムカジーについて、ラマチャンドランは続ける。

「ラムキンカールは私に何かを話して教えるわけではなく、私は師のする仕事のすべてを見、あらゆる瞬間に私は学んでいた。それは彼がスケッチをしているときに、粘土をこねているときも、彫刻をつくっているときも、油絵を描いているときにも、また彼が歌ったり話しているときにも、そして師が演出する演劇で、私が役を演じなければならなかったときにも、あらゆる機会が学びの時であり、学ぶことがないという瞬間はほとんどなかった。このような師匠との関係を私はとても誇りに思っている。そして

今日でも何か仕事上の問題に直面した時には、師を思い出し彼の考えを思いかえしてみるのである。

学を作れといわれたのである。その哲学には枠組みがあり、ラムキンカールがその枠組みを与えてくれ、その枠組みをもって私は活動してきた。

もう一人のシャンティニケタンの師匠に、美術史を伝えてくれたヴィノド・ビハリ・ムカジーがいる。ヴィノド・ビハリ・ムカジーは、私に壁画について教えてくれ、平らなキャンパスに描くのと異なる、壁画の建築的な要素について目をひらかせてくれた。実は私は子ども時代に故郷のケララで、母親にくっついて

ピナート寺院の外壁は、16世紀に描かれた儀礼のための壁画でうめつくされていた。残念なことに大半が消滅し、今はわずかな壁画が残っているのみである。私はこうした壁画の価値や意義を子ども時代には理解することはできなかったが、後になって有名なアジャンタやバールグの壁画の模写を見る機会があり、そのときにはじめて千年もの間続いてきた独自の表現伝統が、自分の故郷にはあった



核時代 1975

ことに気がつかされたのである。このことも自分の伝統とのつながりを重要視させる大きな契機になり、より広く大きな視覚的な表現世界の一部として、美術があることをわかるようになったのである。」

こうしたラマチャンドランの発言により、現在のラマチャンドランの、伝統のつとりその上で独自の世界をうみだすといった作品創造の姿勢は、途中から変化したわけではなく、当初から一貫してシャンティニケタン時代に強烈に育まれたものであることがわかる。

シャンティニケタンを卒業して、次第にラマチャンドランは都会カルカッタで見える人間の悲惨さや貧困そして残酷さといった現実を心をかきみだされ、深い闇におちいった時に、自分自身や自分自身の考えをみいださせてくれたのは、画家ではなく作家のドストエフスキーだった。それ以来彼はドストエフスキーの信奉者であり、ドストエフスキーの思想に

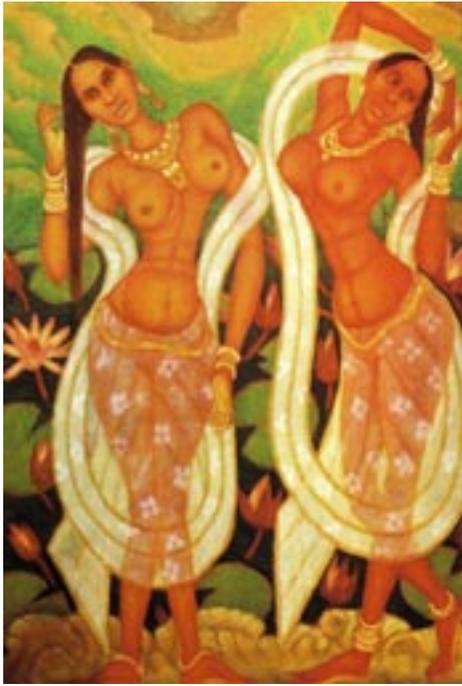


西瓜売り 1976

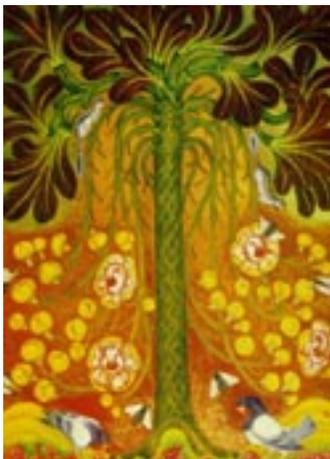
大きく影響された作品をつくった。

もう一つラマチャンドランが大きな影響を受けたと語っているのは、1920・1930年代のメキシコの壁画運動である。一般民衆の力、そして世界をかえようとそれをつらぬく気概に大きく心を揺り動かされ、それを作品の中に反映させていったという。

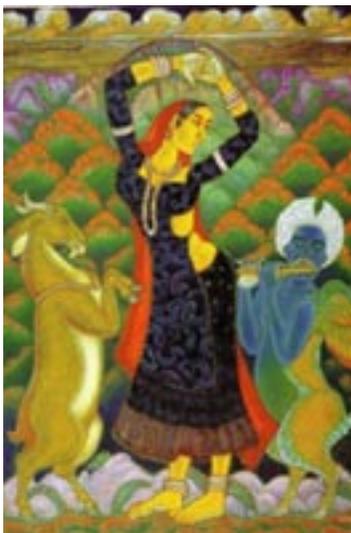
そしてその後インドの首都デリーに移り住んだラマチャンドランは、その時代の様々な政治的事件に鋭く反応し作品を作るようになるのである。ポーランドに行きナチスの強制収容所を見た衝撃から、「解剖授業」と題した作品を描いている。しかしヨーロッパで起こった人間の歴史が、自分の目の前で再び、バングラデシュの独立闘争の中で行われた虐殺として繰り返されたのを見て、ラマチャンドランの中の、人間の残忍さや狂気に



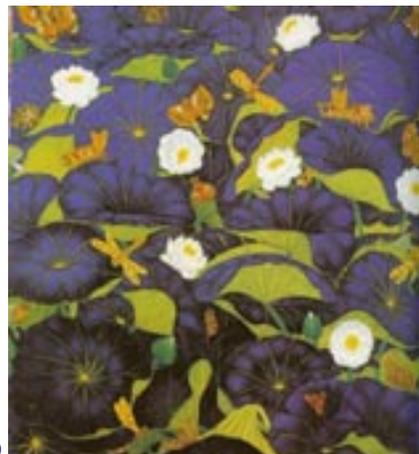
ユリの池 1992



ナガリングの木 1995



メグマルハー 1996



ハスの池 (油絵)

たいする強い嫌悪感は、より強い一般化されたものとなっていく。そして限らない殺戮と暴力の連鎖と1974年に行われたインドの核実験を契機に、彼の人間社会批判はさらに強固なものとなり、「核時代」と題した連作がうまれるのである。

核実験が行われたのは、ラジャスターンのポクランというところであったが、核実験が行われた数年前から、ラマチャンドランはラジャスターンの部族民の村に、定期的にスケッチにでかけ、絵画制作のエネルギーの源を得はじめていた矢先のことだったらしい。そのためインド自身が、広島・長崎の原爆の体験をまったくふまえることなく、自分の美の世界を探索するまさにその土地で、それらを一瞬に消し去ってしまったことは、ぬぐいようのない衝撃をラマチャンドランに残したことは、想像に難くない。

しかしこのころのラマチャンドランは、ラジャスターンに伝わる細密画に傾倒しはじめ、その作品をつぶさに研究していたころだったために、社会批判でありながらもそれを細密画が得意とする、豊かな情趣世界を描くようなかたちで、これを行ったのである。このロマンティックな情緒表現と凄惨な人間世界の描写との組み合わせをラマチャンドランは行い、新しい表現形式を獲得するようになった。

しかし同時に、直接、社会正義を強く求めるような作品を、ラマチャンドランは徐々に作らなくなっていく。それをラマチャンドランは、自分自身がほんとうに身をもって、暴力の犠牲となったわけではないからと述べているが、このころからラジャスターンに自らをいやし、自然にかこまれた人間の生活の原風景のような世界を見いだしていくのである。

それはラジャスターンに住む部族民、

ビールの人々の生活であった。人々の容姿は大地に根ざしたもので、その身につけている衣服、そして自然のリズムと歩みをあわせる生活、植物などすべてが、ラマチャンドランを魅了していき、その後の作品のモデルとなるのである。

そしてついに1970年代ごろから、ラマチャンドランの作品の大転換点ともいえる作品「ヤヤティ」の制作にとりかかるのであるが、なぜラマチャンドランはヤヤティという存在にひかれたのだろうか。ラマチャンドランは40歳代になっ

ていたが、目の片方の視力に問題が生じ、絵をこの後どのくらい描いていけるのか不安になった。そして以前に読んだヤヤティの物語が、突然新しい意味をもってきたとラマチャンドランは述べている。このインド神話であるヤヤティの物語は、強大な権力をもつヤヤティ王は老いて、何があっても若さをとりもどしたいと願う、息子フルに王国をすべてあげた代償として、息子の若さをもらうのである。ヤヤティは自らが失っていくものに執着するが、このヤヤティの経験を絵に表現してみたくなくなったのだというのである。

そしてできた作品が「ヤヤティ」であるが、このヤヤティは大きなキャンパス約12枚で構成され、それらが三方向におかれて、できた空間の中央には赤子のクリシュナ神の彫像がおかれている。ラマチャンドランはこのヤヤティで、快楽を求める普通の現代人を象徴する「礼拝所」を作ったと述べている。現代人はあらゆる時と場所で、快適さや快楽を求め続けているが、それには限りがあり、その限界の向こうには無の世界がひろがっているのである。つまりラマチャンドランはヤヤティを現代人の象徴として表現しているのである。

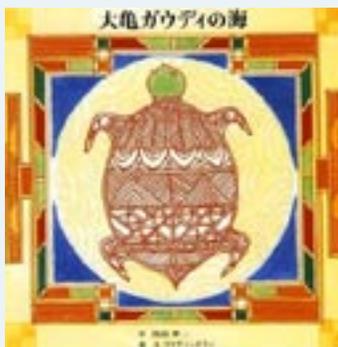
ヤヤティ制作の時代から、ラマチャンドランは積極的に彫像づくりにとりくむようになる。もともと彫像を作りたいと

いう思いはあったが、1995年にバプアニューギニアに行った際に見た高くそびえるトーテムをみて、そのように縦に高くそびえるような彫像を作ろうという考えがまとまった。こうした彫像の代表作品が、「トランスになつて」と題した複数のスタイル化された彫像で、女性たちが円をつくって、そのまわりをまわりながらおどっている。祭りでその女性たちは神がかりとなり、トランス状態にいるが、その中の一体は、筆を手にもち絵をかくラマチャンドラン自身である。

ラマチャンドランの像はその目を閉じてあり、後ろの肩部分に次のような言葉が彫られている。「絵を描くときには、私の頭、手、心は一つになっているのです。ですからあなたの言葉で私の邪魔しないでください」と。ラマチャンドランが絵を描くときにも、このようにトランス状態であることを、彼はラマチャンドラン流のユーモアで語っている。

ラマチャンドランの表現の特色のひとつは「神話」によって、作品の意味を何層にも複数におりこめることにある。

「神話は、自分自身の文化に属する人々に対して、深く広くコミュニケーションを図れる手段」とラマチャンドランが述べているように、人々が自分自身の中に形作れるイメージを、神話の助けによって容易に備えることが可能なのである。



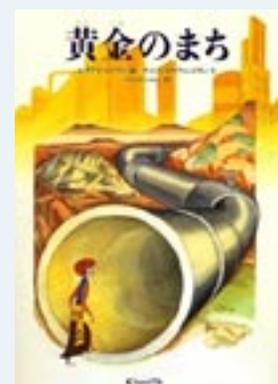
大亀ガウディの海

大都会の高層ビル水族館で飼われていたガウディと呼ばれる大海亀は、長い年月にわたって、水族館での囚われの生活に嫌気がさしてきた。水族館の中は水温は調節してあるし、食べ物も決まった時間にはたくさん食べることができた。しかしガウディは、昔住んでいた自然の海に帰りたいと思い始めてから、海の自然が恋しくて毎日、泣いてばかりいた。それに同情した魚やカニたちは知恵を出し、病気になったふりをして、見事に水族館から逃亡に成功するのだった。しかし、30年後の海の環境は全く変わっていた。南太平洋では核実験も行われ、海水も腐り始めていた。深刻な環境の中であらゆる生物が、生きる場所を求めて大移動をしていた。大亀ガウディは、このような絶体絶命の海の環境の中で、いかに生きていくのか？アジアの国々では、15言語に翻訳されて多くの子どもたちに読まれている物語。(田島伸二作、ラマチャンドラン絵)  
「大亀ガウディの海」日本語版・英語版 ディンディガル・ベル刊 (taeko-k@mse.biglobe.ne.jp)



10にんのきこり

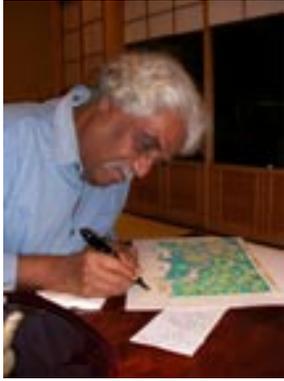
10にんのきこりが山へ木を切りに行った。山には10本の木があった。一番目のきこりが最初の1本目を切り、そして二番目のきこりが2本目の木を切り、そして三番目のきこりが3本目の木を切っていく。きこりたちは「まだある！まだある！」と言いながら木を切り続けるが、切り倒された木々の向こうから、トラの尻尾が次第に現れてくる。そして木がぜんぶ切り倒されたときに・・・そこから大きなトラが現れて、きこりたちは全員食べられてしまう。そして、山には、木は1本もなくなりきこりたちも、1人もいなくなって、0(ゼロ)になってしまうという物語。(インドは、古代にゼロを発見した国として世界に知られている) (ラマチャンドラン作画、田島伸二訳、講談社刊)



黄金のまち

むかしむかし、サティアダルシ(真実を求める人の意)という若者が、各地をめぐるうち、美しいカレカ姫に恋をした。姫を恋いこがれるあまり、黄金のまちを見た姫に告げ、黄金のまちは調和に満ちた世界だと説明する。これを冷笑した姫は、サティアダルシを王国から追放してしまう。うちひしがれたサティアダルシは、ほんとうに黄金のまちを探そうと心に決めたが、どこまでいってもどんな賢人にかいても、黄金のまちの所在はわからない。ついに黄金のまちを知っているという人に会えたが、彼はなぜか黄金のまちからはすぐに立ち去るようにとの謎の言葉を残す。到達した黄金のまちで、サティアダルシは死の床に横たわるカレカ姫を発見する。黄金のまちは、近代文明がたどった悲劇であったという不思議な物語。(ラマチャンドラン絵 チャミリ・ラマチャンドラン文 くらかわたえこ訳)

A. ラマチャンドランの美術の創造はどのようになされてきたのか



京都にて、2007年11月



ラマチャンドランとチャミリ夫妻

こうしてコミュニケーションの共通基盤を神話が築き、ラマチャンドラン自身で伝えたいイメージをその上にのせることで、コミュニケーションがより容易になると述べている。

今回のラマチャンドランが来日した折に直接語ったことだが、このように絵の受け取り手との関係に関心をはらい、いかにコミュニケーションが効果的になりたつかということを考えるようになったのは、日本で子どものための絵本づくりを多くてがけたことが影響していると語っていた。「現代の神話の語り手」としてのラマチャンドランが描く世界は、イ



秋野不矩美術館にて、2007年11月

ンドの伝統に最も深く根ざしているが、しかしその神話の世界はインド文化に属する人のみならず、より多くの人々の感性が共鳴する世界を描いている。ここまで優れた普遍的なレベルに到達したラマチャンドランの美術世界に、日本でもおめにかかれる日がくることを望んでいる。

中国  
面白事情  
孫秀萍

36

全人代から見る中国の民主意識

第11回中国人民大会が成功に幕を下ろした。外から見ると以前と変わらず、一党独裁による定番の会議かもしれないが、さまざまなニュースを集めて見ると、微妙に変化したことがあるとわかる。

日本の国会と違い、中国人民大会は形のもので、決議したことはすべて少数の指導者により、事前に決められたもの。異議を申し立てることもできない。反対することもできない。代表たちもそれを心得て、議決した事項に異議を唱えることがなく、いつも「全場一致通過」のオンパレードであった。それで、全国人民代表大会がただの「ゴムはんこ」だと揶揄されて、代表の人々も賛成しか言えない機械だとかかわれた。しかし、2008年の3月の今回は違う。なんと会議中反対票が多数出たとのニュースが飛び出した。

香港の「明報」によると、中国の新しい国務院指導部の選挙が行われた際、2964名の代表が投票された。そのうち、教育部長の周済は384の反対票を取り、反対票獲得者のトップの座をしとめた。その次は鉄道部部長の劉志軍氏の211票、中国人民銀行行長の周子川氏の156票である。二千人も超える代表のなかで、ただ数百の反対票ではなにもならない、またたいしたことではないと思われるかもしれないが、中国人にとって、これは一大事件だ。手を上げて、賛成の意思しか表示できない大会から、反対票が出るまで半世紀以上もかかったからだ。遅いかもしれないが、この反対票を投じる人々はようやく一票の本当の意味を理解し、また自由に表現できる環境ができたとも言える。そして、その結果を知った中国のプロガーターたちは、口を揃えて、喜んだ。反対票の多さの順番をみると、中国の人々は政府がこれまで行った教育政策、交通政策、および金融政策に対する不満を表しているだと言う。

自由に表現できない中国人の人々にとって、これこそ真の民主意識の芽生えで、中国が民主社会に変貌しつつある兆しでもある。全人代に反対票が出たことがニュースになったこと自体中国の民主現状に悲しむべきものを感じるかもしれないが、喜びを感じる私でもある。

## 「格差社会と識字教育」

～アジア識字活動セミナーが開催されます～

日時：2008年4月26日（土曜日）午後1時～5時

場所：環境パートナーシップオフィス「エポ会議室」

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-67 コスモス青山 B2F

TEL：03-3406-5180 / FAX：03-3406-5064

主催：国際識字文化センター（ICLC）

テーマ：「格差社会と識字教育」ーICLCアジア識字活動セミナーの活動報告セミナーについて

2007年のICLC活動について、最近の映像を交えて、講演や討議を行う

目的：ICLCは1997年の設立以来、アジア地域の子どもや女性の人権・識字活動・環境問題、平和問題などにおいて、多様な活動を推進してきていますが、世界的に貧困・格差や識字環境などはますます深刻化しており、識字教育や人権・平和教育などはいずれの国々でも深刻な課題に直面している。ICLCは、これまで南アジアを中心に推進してきた識字教育や文化活動などをビデオを交えながら報告し、これをベースにグループ毎にテーマを設けて、今後の方向性を策定する実践的なセミナーを開催致します。

報告事項と討議内容：

(1) 女性と子どもの識字

ICLCがこれまでに設置した少年・少女刑務所の4図書館活動の進捗と課題

2007年3月には、ペシャワールにキラン図書館が設置された。

(2) 環境と識字教育

カスールにおける環境教育・環境絵本の普及活動・環境教育教材制作プログラムなどについての報告

(3) カシミール平和絵本の共同制作

これまでにドラフト製作された3点の絵本紹介とこれからの方策

パレスチナ・アフリカ・北アジア・スリランカなど

\*会場にはICLCの写真パネル・パンフレット（和文・英文・ハングル語）など関連資料など多数が展示されます。  
（絵本のドラフト、キラン図書館の資料、絵地図など）

参加費（資料代を含む）

ICLC会員：500円 一般：1000円

連絡先：

国際識字教育文化センター（ICLC）事務局

電話：ファックス 03-5856-1588

メール：iclc@iclc2001.org

URL：http://www.iclc2001.org/

### 2007年のICLC活動

[1月] ミャンマーにおける基礎教育活動(2001 - 2007) [3月] 4館目のキラン図書館の設置（ペシャワール）3館の図書館の訪問と討議内容・課題など [4月] 南インドのダリット女性を対象にした紙漉きプロジェクト、インドのNGOの絵地図分析ワークショップの開催、韓国のNGO、ソウルのスンミュン女子大学での絵地図分析ワークショップ、戦中・戦後の子どもたちへのケアとしての絵本作り（シャンティなど）、アフガニスタン・カンボジアなどの参加者を交えたワークショップ [9月] 国際識字の日の講演会（東都生協） [10月] インドのラマチャンドランの招請と展示会（国連大学1F）の開催、協力団体（国際交流基金、講談社、二期リゾート）、A・ラマチャンドラン講演会の開催（中目黒GTホール） [11月] 南アジアの次世代リーダー養成のセミナー（早稲田奉仕園+国際交流基金）において絵地図分析ワークショップの実施